

# 昌樂寺廻向遺跡

1988

前橋市教育委員会



## 序

昌楽寺廻向遺跡が所在する群馬県前橋市は、北に名山赤城山を望み坂東太郎として名高い利根川や多くの詩人にうたわれ市民の憩いの場となっている詩情豊かな広瀬川が市街地を流れる「水と緑」をキャッチフレーズにした美しい県都です。

このように豊かな自然に恵まれた市域には、今から2万年以前の旧石器時代から近世に至るまでの多くの遺跡が地下に眠っています。特に古墳時代においては、上毛野氏の本拠地として市域にはその数800基といわれる大小の古墳が造られ東国の中心地として栄え、八幡山古墳をはじめとした国指定史跡の古墳8基の外數多くの古墳を今に伝えています。奈良時代・平安時代に至ると上野国は大国と称されその国府（今の県庁）が元總社町におかれ、上野国分寺や國分尼寺なども建立され、上野国の政治・経済・文化の中心地として発展してきました。

中世においては、戦国武将の上杉氏、武田氏、北条氏が支配を争う要所となり、近世においては、徳川家康から「関東の華」と称されたこの地には関東三名城の一つとして知られる駿橋城が築かれ、諸大名の酒井氏が藩政を執り行いました。

このように、前橋の地は豊かな自然とともに長い歴史に培われて発展してきたのであります。今後も各種開発に伴う発掘調査の成果により、さらに本市域の古代史の空白部分が解明されていくものと確信しております。

このたび、藤和土地建物株式会社より前橋市教育委員会へマンション建設に伴う埋蔵文化財の取扱いについての問合せがあり、確認調査を実施しましたところ、遺跡地であることがわかりました。遺跡の取扱いについて関係者と協議・調整を行いました結果、前橋市教育委員会による緊急発掘調査を実施することになりました。

発掘調査の結果、奈良～平安時代のものと推定される住居跡二軒と埋土中より多数の縄文土器を確認いたしました。小さい遺跡の調査ではありましたが、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、この調査を実施するにあたり、物心両面にわたり多大な援助をしていただきました藤和土地建物株式会社、また作業に従事していただきました方々に対し厚くお礼申し上げます。

本報告書が、元總社町及び周辺地域の歴史を解明する一助となり、また考古学研究の参考になれば幸いに存じます。

平成元年3月10日

前橋市教育委員会

教育長 岡本信正



## 目 次

はじめに	頁
I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	1
III 調査の経過	4
IV 層序	4
V 遺構と遺物	5
VI まとめ	9

## 例 言

1. この報告書は、藤和土地建物株式会社により建設されるマンション予定地における発掘調査に関するものである。
2. 調査は、前橋市教育委員会管理部文化財保護室埋蔵文化財係が担当し、遠藤和夫・新保一美が参加した。
3. 本書の作成は、遠藤和夫・新保一美が共同討議のうえ、執筆・編集にあたった。
4. 本遺跡の略称は、63A31である。
5. 遺構の略称は次のとおりである。

H……住居跡

6. 遺構・遺物実測図の縮尺は次のとおりである。

遺構……全体図 1/250 住居跡……1/40 遺物……1/2

## I 調査に至る経緯

昭和63年4月12日付で、本調査地のマンション建設に伴う埋蔵文化財試掘調査依頼が武藤完一氏より提出され、5月2日に前橋市教育委員会文化財保護室職員により、幅1m、南北18m、東西25mのトレンチが設定され、試掘調査を実施したところ、建設予定地の西側部分で、奈良・平安時代のものと思われる住居跡一軒が検出された。

工事着工に際しては、事前の発掘調査が必要であるという教育委員会の回答に対して、5月27日付で同氏より発掘調査依頼が提出され、事業者と協議・調整の結果、小規模遺構であり、また短期間の調査であるということで前橋市教育委員会により調査されるに至った。

なお、本遺跡の名称は地租改正図による旧字名を採用し、昌楽寺廻向遺跡とした。

## II 遺跡の位置と環境

### 1. 遺跡の立地

昌楽寺廻向遺跡は、前橋市の西部を南北に流れる利根川の右岸、前橋市元総社町2882-10に所在する。遺跡は、大友町西通線（通称産業道路）の西側に隣接しており、西1km付近には関越自動車道、東500m付近にはJ R上越線がそれぞれ北西方向へ走っている。

地形的に見ると、本遺跡は、今から約24000年前の洪積世後期に火山性の泥流により形成されたと推定される前橋台地の北西部にあり、榛名山麓に源を発する牛池川・八幡川によって開拓された台地上に位置する。遺跡地の北約150m、及び東約150m付近を八幡川が遺跡のある台地を中心にして北から南へ弧を描くように流れている。付近の標高は、約122mで遺跡と八幡川の比高差は、およそ2~3mである。

### 2. 歴史的環境

#### ① 旧石器時代

1でも述べてあるように、本遺跡地は今から24000年前の泥流によって形成された台地上にあるため、それ以前の旧石器時代の遺跡は周辺には皆無である。

#### ② 繩文時代

前橋台地には、縄文の遺跡が極めて少なく、利根川の西の総社地区も同じような傾向にある。ただ、昭和41年7月の産業道路新設の際、総社町総社丁間稲荷の北で縄文時代中期後半のものと見られる石囲い炉をもつ、径5m程の住居跡が確認されている。

さらに、昭和44年3月同じく産業道路新設の土取り作業の際、前述の遺跡から西北約150mほどの低台地のほぼ中央でやはり石囲い炉をもつ住居跡が確認されている。炉及び埋設土器の形状から遺構は、縄文時代

昌楽寺跡向遺跡の位置



後期前半のものと推定されている。（産業道路西遺跡）

③ 弥生時代

本遺跡周辺における弥生時代の遺跡の調査例は少なく、清里庚申塚遺跡・国分寺中間地域遺跡・下東西遺跡・桜が丘遺跡等にわずかに見られるのみである。

④ 古墳時代

昭和13年発行の上毛古墳総観には、總社町分として第1号王山古墳を始めとした大小15の古墳が記載されているが、周辺に大きな集落は確認されていない。

前期の集落跡の調査としては、鳥羽遺跡・国分寺中間地域遺跡・元總社明神遺跡・中尾遺跡などがあり、中、後期の調査例としては、下東西遺跡・閑泉橋遺跡・国分寺遺跡などがある。

⑤ 奈良・平安時代

總社・元總社地域に大規模な集落が現われ始めるのは、上野国府がおかれてまもなくの奈良時代あたりからで、平安時代に至ると国府の発展もあり、人口の増加に伴い集落は爆発的に発展する。大規模な住居群の調査例としては、鳥羽遺跡・国分寺中間地域遺跡・元總社明神遺跡・下東西遺跡などがあげられる。

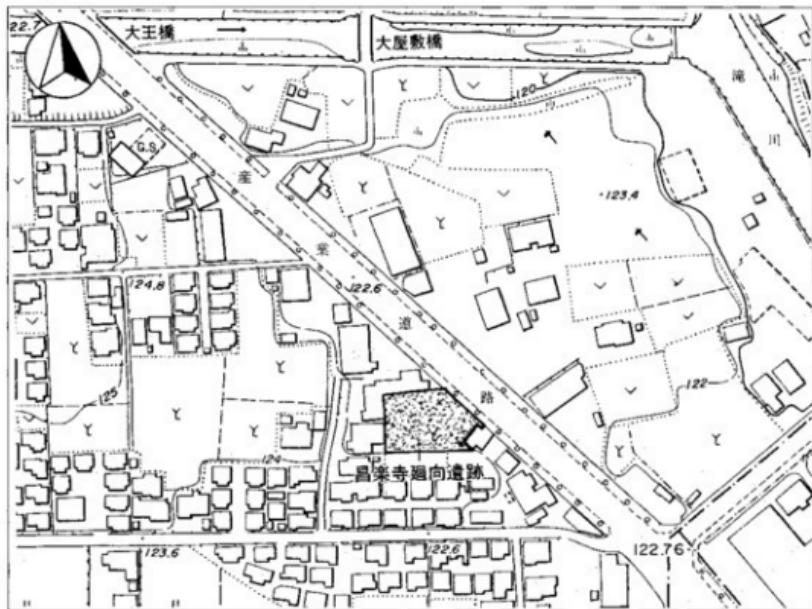


fig. 2 昌楽寺廻向遺跡周辺図

### III 調査の経過

発掘調査は、昭和63年6月21日～29日の間に実施された。表土は試掘調査の際に既に除去済みであったので、調査は住居跡の掘り下げ作業から入った。覆土は20cmと薄く出土遺物も少なかつたため順調に進めることができた。なお、試掘の際確認されたH-1以外の焼土は、精査の結果小住居のカマド跡であることが分かった。29日(水)に全景写真を撮り調査は終了した。

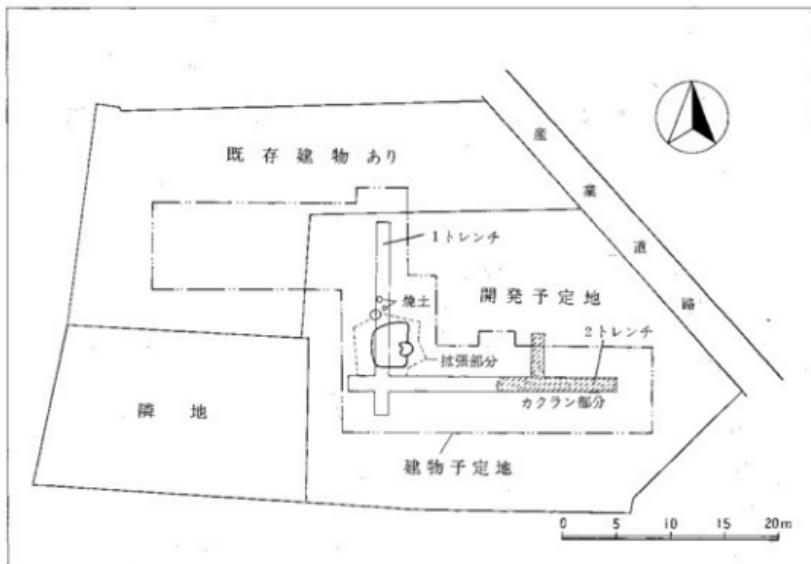


fig. 3 昌楽寺廻向遺跡調査区域図 (1/250)

### IV 層序

#### 土層の注記

- 1 燃土 (縄文土器を多く含む搬入土)。
- 2 褐色土層 粘性なし、FP-FAを1～2%含む。
- 3 黒褐色土層 粘性なし、4層の漸移層。
- 4 ソフトローム層 粘性ややあり。
- 5 灰白色土層 粘性なし、サラついている。
- 6 灰白色土層 粘性なし、固くしまっている。
- 7 灰白色土層 粘性なし、サラついている。
- 8 灰白色土層 7層よりしまりあり。礫含む。
- 9 灰白色土層 粘性あり、微砂。
- 10 砂層。
- 10a 砂層。
- 11 灰白色土層 粘性あり、しまりあり。
- 12 灰白色土層 粘性なし、礫を含む。

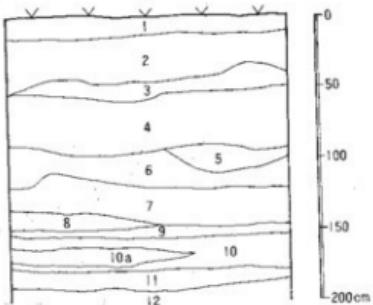


fig. 4 昌楽寺廻向遺跡標準土層図 (1/20)

## V 遺構と遺物

### H-1号 住居跡

本住居跡は、すでに削平・整地を受けているため、残存状態は壁高20cmのみであった。主軸方位は、N-3°-Wで南北3.8m・東西3.68mのほぼ方形を呈している。周溝・柱穴・貯藏穴はなく貼床も認められなかった。カマドは東壁に付き、壁に対し直交する造りであった。

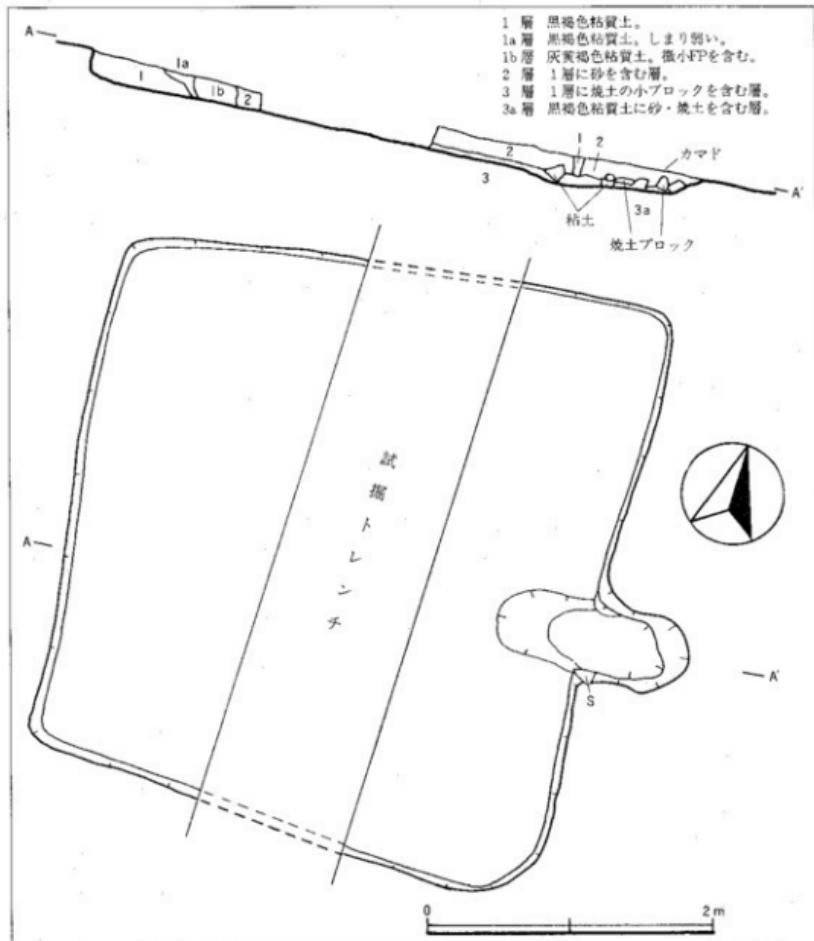


fig. 5 H-1 住居跡 (1/40)

## H-2号 住居跡

すでに擾乱を受けていたために、北側と西側の平面プランは確認できなかった。柱穴・廻溝・貼床は確認できなかった。カマドは二基検出され、その内南側のカマドは、焼土はあるもののカマド構築材と思われる白色粘土が残っている状態であった。また北側のカマドからは白色粘土は見られず、焦土と灰及び埋土の状態であった。これらの条件から判断すると、二つカマド同時使用の住居と考えるよりも、何等かの理由で一度作られたカマドが短期間のうちに使用されなくなって、新たに作り替えたものと考えられる。また、住居跡の東南隅の貯蔵穴状のピットは、この住居以前の時代の北に張り出すカマド跡であったが、地層断面からも平面プランからも、これに応じる住居は確認できなかった。

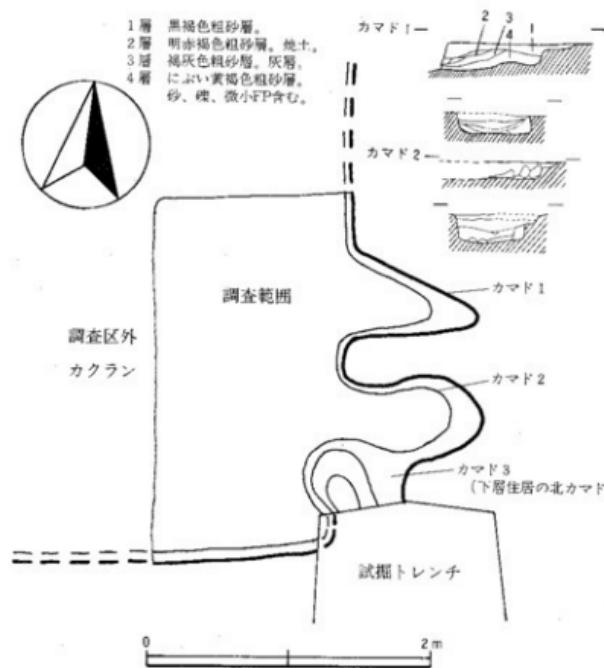


fig. 6 H-2 住居跡

## 2. 遺物

調査地は、縄文遺構で知られる産業道路西遺跡（前橋市史第1巻参照）の地であり、周辺の畠地には多くの縄文土器片が散布している。調査区内は著しい擾乱を受けており、縄文遺構の発見には至らなかったが、周辺にはその存在の可能性があるものと思われる。

H-1号住居のカマド右袖から支脚にかけて、須恵器の壺が傾斜して出土したが、諸状況から判断して流れ込みの可能性が高い。

床面直上からは、口縁部が内湾する土師製の壺が、一点はカマド右から、もう一点は南壁際中程から検出された。カマド前からは、須恵器壺が検出されている。

ほかに試掘時に、土師製の壺が検出されているが、内外面共に器肌が荒れている。

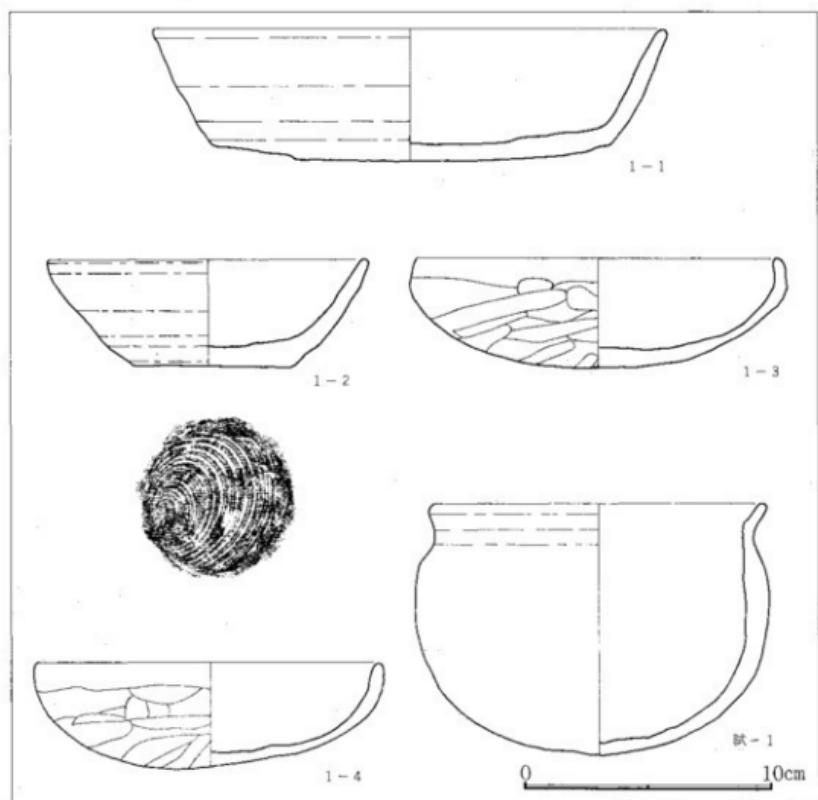


fig. 7 昌楽寺廻向遺跡出土遺物 (1/2)

tab. 1 昌樂寺廻向遺跡出土遺物観察表

No.	登録番号	器種	法量		残存	胎土	色調	成・整形方法		備考
			口径	器高				口・胴部	底 部	
1	1-1	环 (頸部)	17.7	4.5	%	砂質	灰白	口縁に向かって器肉 が厚くなる。	ヘラ削り	ロクロ整形。
2	1-2	壺 (頸部)	11.2	3.6	%	砂質	灰褐色	壺部内湾。 二次焼成痕あり。	回転糸切	ロクロ整形。 輝石、鉱石含む。
3	1-3	环	13	3.75	%	褐	橙褐色。一部に 二次焼成痕有	口縁部内湾。 横ナデ。	ヘラ削り	粗粒の酸化鐵。 粗砂礫を含む。
4	1-4	环	11.8	3.4	%	密	赤褐色	口縁に向って器肉が薄 くなり直立する。横ナデ。	ヘラ削り	輝石、鉱石、粗砂を 含む。
5	試-1	壺	12	8.7	%	密	赤褐色。内外に 二次焼成痕	口縁部外反。横ナデ。 器机が荒れている。	ヘラ削り	輝石、鉱石、粗砂を 含む。

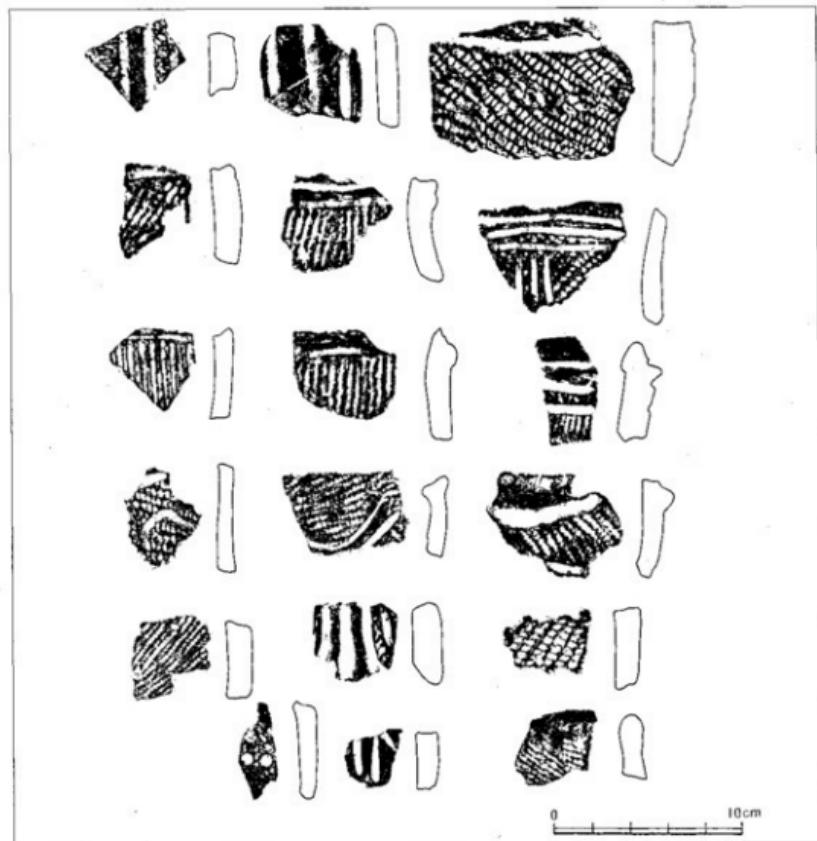


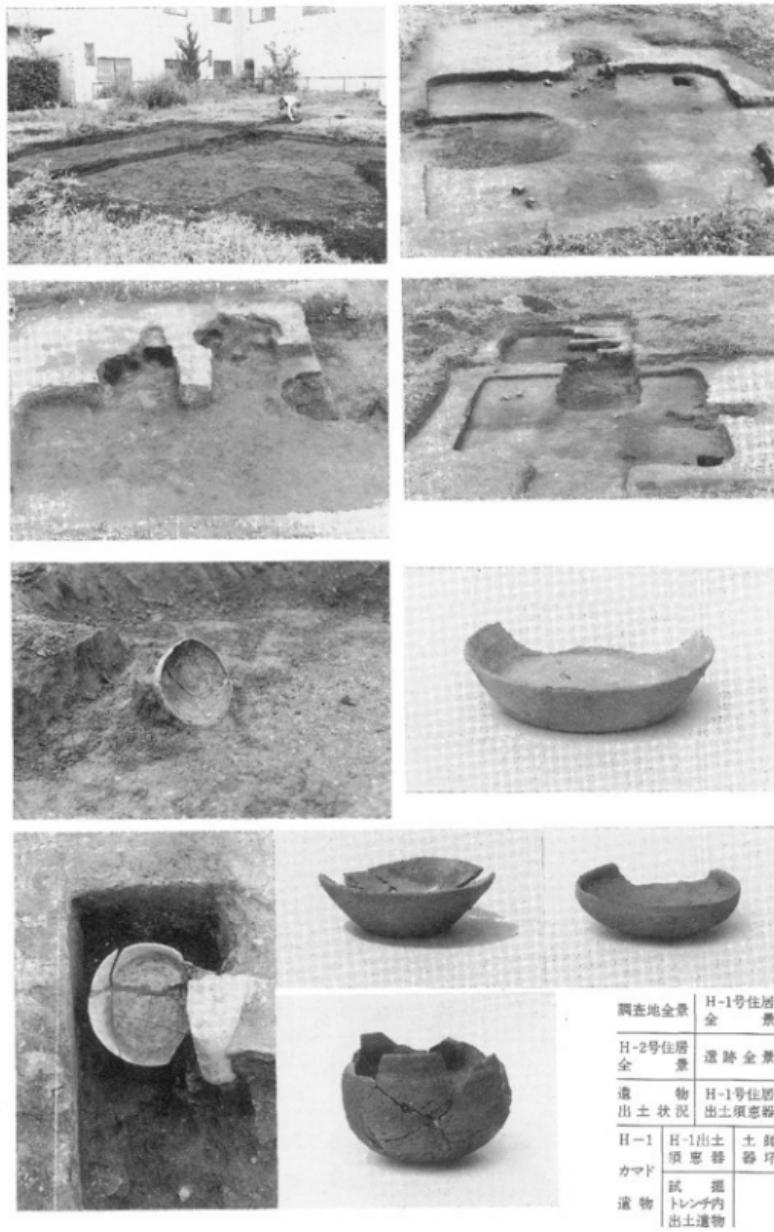
fig. 8 昌樂寺廻向遺跡出土遺物 (1/3)

## V ま　と　め

当初住居跡1軒のみの調査ということであったが、精査の結果住居跡2軒を検出することができた。溝、土坑等の遺構は、本遺構からは発見されなかった。試掘調査の際F P（6世紀前半～後半の榛名山二ツ岳を供給源とする白色系軽石）を含む黒色土中から多量の縄文土器が見つかっていることや、産業道路敷設の際に埋設土器・石閉戸を有する縄文時代中期後半の住居跡が調査されていることなどから、縄文時代の遺構が発見されるのではないかと思われたが、結果的には遺構の検出には至らなかった。黒色土中の縄文土器の取扱いであるが、堀越遺跡（62年度調査・大友町）、元総社明神遺跡Ⅷ（63年度調査・元総社町）でも同じように黒色土の中から同時代の土器が見つかっており、遺構にかかわるものかどうか判断に迷うものである。なお、両遺跡とも同時代の遺構は、検出されていない。地層の成立から考えると数千年前の縄文文化の遺物である土器が6世紀降下の火山灰土層中から出土するということ自体がそもそも理にあわないことである。本遺跡をはじめ堀越遺跡・元総社明神遺跡とも現在の耕作土・盛土中からではなくF P混入黒色土中から同土器が出土しているのである。ということは、現在の人为的な土の搬入によるものとは考えにくく、他の要因によるもの（泥流による流れ込み等）が考えられる。ただ、先にも述べてあるように本遺跡に近接する所で縄文住居が調査されているので概に流れ込みによるものとも判断できない。いずれにしろ周辺地域の調査が進むにつれて黒色土中の縄文土器の解釈についても、明らかになっていくものと思われる。

住居跡についてであるが、出土遺物により時期としては、奈良～平安時代のものと推察できる。住居跡は、東に向かって舌状に広がる台地の中央部に確認されており、産業道路を隔てた台地先端部では、昌楽守廻向II遺跡（63年8月調査）の同時代住居跡4軒が調査されている。遺跡周辺の遺物分布状況を調べてみると、集落は本遺跡を中心にして西の方に広がる傾向にある。

本遺跡の西約300mの所には、白鳳期の創建と推される古代寺院山王廃寺跡があり、当時の集落は、その寺域を取り囲むように広がっていたものと思われる。本遺跡は何等かのかたちで山王廃寺や南方約1kmの所に所在したとされる上野国府にかかわっていた集落跡と思われるが、いずれにせよ推察の域をでないので今後の周辺地域の調査に期待するものである。



## 調査要項

遺跡名称 昌楽寺廻向遺跡（しょうらくじまわりむかいいせき）  
遺跡所在地 群馬県前橋市元総社町字昌楽寺廻村東2882-10地  
遺跡記号 63A31  
調査期日 表面調査 昭和63年4月28日  
試掘調査 昭和63年5月2日  
発掘調査 昭和63年6月21日～  
昭和63年6月29日  
調査面積 約100m<sup>2</sup>  
開発面積 約1584m<sup>2</sup>  
調査原因 民間開発（賃貸マンション建設）  
調査依頼者 藤和土地建物株式会社  
取締役社長 武藤完一  
調査主体者 群馬県前橋市教育委員会  
教育長 岡本信正  
事務局 管理部長 二瓶益巳  
文化財保護室長 福田紀雄  
埋蔵文化財係長 浜田博一  
調査担当者 遠藤和夫・新保一美  
調査参加者 近藤充郎・近藤俊男  
調査協力 藤和土地建物株式会社

---

### 昌楽寺廻向遺跡(63A31)

---

印刷 平成元年3月20日

発行 平成元年3月25日

発行者 前橋市教育委員会 前橋市大手町2-12-1

印刷所 有限会社文精社印刷所

---



